

名品コレクション展 I

2024年4月6日(土) ~ 6月9日(日)

名古屋市美術館のコレクション

エコール・ド・パリ

第一次世界大戦後、芸術の都パリには世界各地から夢を抱いた若い美術家たちが集まってきました。

モディリアアーニ、シャガール、スーチン、パスキン、キスリング、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、ザツキン、ブランクーシなど、故郷を離れた異邦人たちは、貧しいながらも自由に活気に溢れた生活のなかで、パリ生まれのクトリロ、ローランサンといった画家仲間との交友や新しい芸術が次々に登場するパリ画壇に刺激されながら、それぞれ独自の芸術を開花させました。

芸術の都パリに育まれた画家たちは、総称して「エコール・ド・パリ」と呼ばれています。身近な人々の姿や街角の風景を描いた彼らの作品には、キュビズムやシュルレアリスムといった同時代の前衛的な芸術とは違って、庶民生活への親密感が溢れるとともに、異邦人としての郷愁が漂っています。

「エコール・ド・パリ」の系譜につながる日本人画家としては、パリに生きパリの描き続けた荻須高德をはじめとして、田中保、海老原喜之助、岡鹿之助などが活躍しました。

メキシコ・ルネサンス

20世紀初頭のメキシコ革命を背景として、マヤ、アステカといったインディオ文明の復興と新しいメキシコの建国精神を民衆に伝えるために創始されたメキシコ壁画運動は、アメリカ大陸において初めて登場した美術運動として「メキシコ・ルネサンス」とも呼ばれ、世界的に高く評価されています。

壁画運動の三大巨匠であるオロスコ、リベラ、シケイロスはイタリア・ルネサンスの壁画をはじめとして、ヨーロッパの近代美術（表現主義、キュビズム、未来派など）に学びながら、メキシコ民族独自の造型を踏まえた現代の壁画を三者三様に創造しました。

彼らは1930年代のアメリカ合衆国においても数多くの壁画制作を行って、「アメリカン・シーン」の画家たち（シャーン、スローンなど）をはじめとして、アメリカの現代美術の誕生に大きな影響を与えています。

三大巨匠の他にも、壁画運動以降の世代を代表する画家タマヨ、民衆版画家ボサダ、魅力的な女性画家カーロやイスキエルド、写真家ブラボーやモドッティなど、数多くの個性豊かな美術家たちが活躍しました。

北川民次もまた同時代のメキシコに滞在して、野外美術学校の運動に携わりながら、壁画運動から学んだ精神と画風によって、帰国後は日本画壇において「反骨の画家」として活動しました。

現代の美術

第二次世界大戦以降、急速に展開した現代美術は、既成の美術の枠組みを越えて、まったく新しい表現や造形、空間や概念を開拓してきました。パリからニューヨークへ中心地が移行して、国際化した美術界において、数多くの日本人作家が海外に進出して、創作的な活動を活発に展開しています。

名古屋文化圏もまた、荒川修作、桑山忠明、河原温といった国際的に評価の高い作家たちを輩出しました。彼らは、ある特定の概念を言葉や記号などによって提示する「コンセプチュアル・アート」や表現を極限まで切り詰めた「ミニマル・アート」などの現代美術の分野の代表作家として知られています。

1980年代以降になると、現代美術は新しい局面を迎え、その表現と内容がより豊かに多様化して、それぞれの作家の思想（芸術観）が作品のなかに明確に現れてきました。

新しい世紀の激動に翻弄されながら現在も、作家たちは私たちが生きている時代と世界を、過去から未来へと連続する時間の流れのなかで、あるいは生命と宇宙の連関のなかで、それぞれ独自の観点から鋭く探求し、深く思索することによって、新しい美術を創造しようとしているのです。

郷土の美術

名古屋の近代美術は、明治後期頃から本格的に始まりました。東京に学んだ野崎華年と鈴木不知が洋画塾を開設して、後進の指導を始めるとともに、東京美術学校に学んだ加藤静児や太田三郎が文展に入選するようになって、1910年には、名古屋の洋画家・日本画家を結集した東海美術協会が創設されました。

大正期には、名古屋独自の洋画グループとして、岸田劉生の草土社に触発されて1917年に結成された愛美社（大澤鉦一郎、宮脇晴など）や関東大震災を契機に1923年に結成されたサンサシオン（松下春雄、鬼頭鍋三郎など）などが登場しました。

昭和期には、二科会の初期の会員となった熊谷守一や横井礼以、春陽会に参加した山本鼎、帝展の代表作家となった佐分真、独立美術協会に参加した伊藤廉や三岸好太郎、三岸節子などが東京画壇で活躍しました。1930年代の前衛美術の分野では、シュルレアリスム絵画・写真（北脇昇、下郷羊雄、山本悞右など）や抽象絵画（村井正誠、矢橋六郎、山田光春など）が活発な活動を展開しました。

日本画では文展の川合玉堂、院展の前田青邨をはじめ、地元では平岩三陽、渡辺幾春などが活躍しました。

エコール・ド・パリ 藤田嗣治

今季の名品コレクション展 I では、名古屋市美術館が所蔵および受託する藤田嗣治の作品を中心に展示します。当館が所蔵する藤田作品は、《自画像》(1929年)にはじまり、現在では収蔵作品8点、受託作品(特別資料含む)9点の計17点にのぼります。開館してから35年間、時間をかけて少しずつ充実し、今では初期から戦後までの藤田の画業を幅広く概観できる作品がそろっています*。

藤田嗣治は、1886年に東京に生まれ、東京美術学校西洋画科を卒業後、1913年に単身フランスへ渡ります。渡仏の約1年後には第一次世界大戦がはじまり、多くの日本人はパリを離れましたが、藤田は留まることを選びました。《風景》(1918年)は、疎開もかねてモディリアーニらと南仏カーニュに滞在したときの作品で、素朴派の影響を感じさせます。自分のスタイルを確立するまでの試行錯誤の期間と言ってもよいでしょう。

1920年代になると、藤田の代名詞である“乳白色の肌”をした裸婦像などが人気を博し、華々しい活躍を見せます。《裸婦》(1929年)はまさに、面相筆による細くしなやかな線描と陶器のような肌の表現が印象的な作品です。丸眼鏡におかっぱ頭が個性的な《自画像》(1929年)は、自信に満ちた表情を浮かべています。

1929年に16年ぶりの帰国を果たすと、1931年、藤田は中南米旅行に出発します。その後も東北地方や沖縄、中国大陸などに赴き、民俗的なモチーフに強い関心をもって、土着の人々の姿や生活を描きました。《那覇》(1939年)は、沖縄旅行の翌年に制作された小品で、眼鏡や時計を扱う商店の外観を描いています。

戦中、藤田は国内に留まり、戦争記録画の制作を中心に活動します。当館は、1940年代の藤田の活動が垣間見える資料として、『陸軍軍医中將 藤田嗣章』を収蔵しています。陸軍の軍医総監を務めた父・嗣章の業績をまとめた書籍で、見返しのために藤田が描いた秋海棠(シュウカイドウ)の花の原画も残されています。

戦争に協力した責任を追及された藤田は、1949年に日本を離れ、ニューヨーク経由でパリに戻ります。その後、画家が日本の地を踏むことはなく、1955年にはフランス国籍を取得、1959年にはフランス北東部の町ランスの大聖堂でカトリックの洗礼を受け、「レオナルド・フジタ(洗礼名)」となりました。《二人の祈り》(1952年)には、聖母子に祈りをささげる藤田と妻・君代の姿があります。自分たちの信仰の証として制作されたこの作品は、長く夫妻の自室を飾り、藤田が亡くなったあとも、君代夫人が最期まで大切にしていたといえます。

*本展で展示するのは、収蔵および受託する作品の一部です。

コレクション解析学 藤田嗣治《家族の肖像》1932年 《ベルギーの婦人》1934年

今回は、藤田嗣治(1886-1968)が1930年代に描いた2点の素描を取り上げます。エコール・ド・パリの画家として知られる藤田は、美しい乳白色の裸婦像が人気を呼び、1920年代のパリで華やかな成功をおさめます。そして1929年、16年ぶりに日本に一時帰国を果たすも、そのころから経済的な問題や家庭内での不和を抱え始めた藤田は、1931年秋に中南米に旅立ちます。1933年秋に帰国するまで、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ペルー、エクアドル、パナマ、キューバ、メキシコ等の国々を旅し、現地で開催を開いたり、注文制作を受けたりしながら周遊しました。この中南米旅行に始まる1930年代は、藤田にとって、民俗的なモチーフに強い関心を示し、濃厚な色使いへと転換していく変革の時期に当たります。

《家族の肖像》は、母親と3人の子どもたちの姿をおさめた素描です。鉛筆と白のパステルで細部まで丁寧に描かれており、旅行中に注文を受けて制作したものと考えられます。長い間、この作品のモデルについては、詳しいことが分かりませんでした。このたび調査によって、アルゼンチンの上流階級に属する一家であることが判明しました。1932年、藤田はブエノスアイレスとロサリオで個展を開催しており、そうした機会に発注者と知り合った可能性が高いと考えられます。

《ベルギーの婦人》は、中南米旅行から日本に帰国した翌年に制作された作品です。モデルの女性については特定されていませんが、ベルギー大使館関係者である可能性が高いと推測されています。というのも、当時藤田はベルギー大使館に頻りに出入りしており、大使館で開催されたパーティで大勢の肖像を描いて喜ばれたことが、日記に残っているためです。女性の背景には、瑞雲や巻子、軍配、珊瑚等、吉祥を表す文様が散りばめられており、民俗的なモチーフに対する関心が見てとれます。

コレクション解析学では、これら2点の作品について、最新の調査研究の内容をご紹介します予定です。

コレクション解析学 2024

当館のコレクションから1点を選び、その魅力を学芸員が紹介する美術講座です。

本作品についての講座を以下のとおり予定しております。

日時：2024年6月1日(土) 14:00- (約90分)

演題：「モデルについて」

講師：森本陽香(当館学芸員)

会場：当館2階講堂(定員180名、先着順、入場無料)

現代の美術 追悼 桑山忠明・村上友晴

長きにわたって活躍を続けた現代美術家・桑山忠明と村上友晴が、2023年、ともに逝去しました。桑山は1932年に名古屋に生まれ、東京藝術大学日本画科を卒業後、若くして渡米しニューヨークを拠点にミニマリズムの文脈で活躍しました。村上は1938年に福島県に生まれ、東京藝術大学日本画科を卒業、やがてキリスト教に帰依し、黒を基調とした絵画で祈りとしての表現を探究し続けました。日本画を出発点に、1960年代以降の現代美術で独自の地位を確立し、国際的にも高い評価を受けた点で、二人は共通しています。名古屋市美術館では2010年に「静けさのなかから」と題して桑山と村上の二人を取り上げた展覧会を開催しました。この展覧会では、前期/後期で時期を分けてそれぞれの個展形式で展示し、二人の作品が同じ空間に展示されることはありませんでしたが、今回は二人の作品がこの展示室に同時に並ぶこととなります。

初個展を開いた1961年、桑山は日本顔料（岩絵具）をアクリル溶剤でといたものを絵具として使用していましたが、やがてアクリル絵具へと移り変わり、1970年代にはエア・スプレーを使ったメタリック・ペイントへとシフトしていきます。そうして、作品の表面から画家の手の痕跡が徐々に消え去り、工業製品のような趣をもつ色面になっていきました。《無題》（1970年）や《無題》（1973年）では、異なる色面の組み合わせが見られます。別の色を組み合わせることで繰り返し生まれ、「永遠につづくラインの一部であると感じられる」*といます。

1960年代半ば頃から何度も北海道のトラピスト修道院（北斗市）を訪れるようになった村上は、カトリック教会の洗礼を受け、正式に信徒となります。修道士のように規律ある生活の中で、絵画の制作は神への祈りと密接に結びついた行為となっていました。黒を基調として一本一本の線を丁寧に重ねていく手法は変わりませんが、やがて鮮やかな赤が混ざるようになったり、鉄筆でひっかいたり、ニュアンスの変化があらわれるようになります。

手作業の痕跡を消し去り、従来の絵画とは別の領域を目指した桑山と、長い時間をかけて手仕事を積み重ね、絵画によって信仰のひとつのあり方を示した村上は、対照的な制作スタイルをもつ二人といえます。しかし、二人の作品は静けさと緊張感をあわせもつ点で共通しており、響きあうなかをもっているように思われます。1960年代初頭から約60年間にわたり、激変する周囲の状況に惑わされることなく一貫した姿勢で描き続けた二人。それぞれの画業に思いをはせながら、作品をじっくり眺めてみてはいかがでしょうか。

*「桑山忠明インタビュー」『桑山忠明展』2011年、金沢21世紀美術館、27頁。

メキシコ・ルネサンス 英雄と民衆

メキシコ・ルネサンスの芸術作品は、メキシコ革命の歴史的意義やメキシコ人としてのアイデンティティを描くというその性質上、歴史上の人物、革命の英雄、そして名も無きメキシコ民衆がテーマとして頻りに選択されました。今回の展示では、名古屋市美術館のメキシコ・ルネサンスの作品のうち、人物を描いた作品に「英雄」「民衆」という2つの補助線を引いて見ていきます。

メキシコ革命の指導者の1人であるエミリアーノ・サパタ（1879-1919）は、農地改革を唱え、特定の大地主が独占する土地を農民に再配分することを主張しましたが、当時としては急進的な主張であったことから暗殺されました。虐げられた農民の解放を訴えたサパタは革命と民衆を繋げる存在であり、多くの画家がサパタを描きました。ホセ・ガダルルーペ・ボサダはサパタの姿を骸骨に見立てて描き、ディエゴ・リベラはメキシコ文部省やコルテス宮殿の壁画にサパタを描きました。1931年のニューヨーク近代美術館で開催されたリベラの個展で、リベラは「移動可能な壁画」として8点のフレスコ画を制作しましたが、その中の1つがコルテス宮殿のサパタの絵をトリミングして新しく描いた《農民指導者サパタ》でした。名古屋市美術館蔵の版画は、そのフレスコ画をさらに版画化したという複雑な経緯を持つ作品です。また、スペインの侵略に抗ったアステカの英雄カウテモックは、ダビッド・アルファロ・シケイロスが好んだテーマの1つでした。サパタが革命と民衆を繋げる存在であったように、カウテモックはスペインによる侵略から革命に至るまでの長く続く抑圧の時代の出発点に位置する存在でした。

一方で、メキシコ・ルネサンスの作品には多くの名も無き民衆も登場します。シケイロスの《奴隷》には抑圧された民衆の姿が描かれています。ホセ・クレメンテ・オロスコの《メキシコ風景》には画面右側に農園領主夫人、左側に小作人の母子が描かれています。画面の中央に描かれたマゲイ（竜舌蘭の一種）はテキーラや生活必需品の原料で、サパタが問題視していた大農園の主力生産品であり、左側の母子もまた抑圧された民衆を示唆しています。同じくオロスコが1929年に描いた《地下鉄／労働者（失業者）》では、同年の世界恐慌で職を失っただろう労働者が描かれており、これも革命以降の経済不況に巻き込まれた民衆の姿です。フランシスコ・スニガは《立ち尽くす孤独》のように先住民の女性を主題とした彫刻を多数手がけました。北川民次の野外美術学校で学んだアマドール・ルーゴは、歴史的な主題よりもむしろ身近な風景や人物を主題とする絵を描きました。

今回の展示では、特別出品としてボサダの亜鉛版を展示します。量産可能な版画に比べ、原版は世界に1点しかなく、国内で発見されることは滅多にありません。詳細については今後調査を進めていく予定ですので、続報にご期待ください。

郷土の美術 中村正義・平川敏夫生誕100年

中村正義(1924-1977)、平川敏夫(1924-2004)は、共に愛知県生まれの日本画家です。正義と平川は戦後すぐの1947年に我妻碧宇の「新日本画研究会」で交流を深めました。平川は1950年の第3回創造美術展に初出品で入選を果たし、画家としてのキャリアをスタートさせました。創造美術展の出品には中村正義の力強い後押しがあり、平川は入選以降、創造美術(1951年に新制作協会日本画部、1974年に創画会と名称変更)を中心に活動しました。1959年に描かれた魚介類の寄書には、我妻、正義、平川に加え、岡崎市出身で我妻や正義と同じ中村岳陵門下の倉光博之の名が見え、交流の様子が伺えます。1953年に豊橋市に開設された中日美術教室では、正義と平川は星野真吾、高畑郁子、大森運夫と共に、講師として絵画指導を行いました。

正義は1946年に日展に初出品・初入選を果たして以降、同展を中心に活躍し、1960年には36歳という若さで日展の審査員となりました。しかし、その翌年に日展を脱退、直後に平川と写真家・名取洋之助と共にヨーロッパ旅行に出かけました。当時の正義は褐色系の風景画を多く描き「セピアの正義」として知られていました。平川も同じく当時は褐色系の作風で知られており、《陶土のある町》のような黄土色を主体にした作品を発表していました。しかし、このヨーロッパ旅行の前後から、両者の作風は真逆ともいえる変化を示していきます。

正義は帰国後、急速に色彩への関心を深め、日展脱退後の初個展「男と女」(1963年)では、鮮烈な色彩と単純な構図の作品を30点余り展示し、新たな境地を示しました。ボンドで絵具を攪拌して画面に垂らす、蛍光塗料を垂らす、段ボールなどをコラージュするなど、その手法も実験的なものでした。《男》《女》の2作は「男と女」の出品作です。

平川はこの頃、後に自身の代名詞となる樹木のシリーズを描きはじめたばかりでした。1959年の伊勢湾台風の被害で白骨化した木々が、翌夏に一斉に芽吹いた様子を見て衝撃を受けた平川は「自然の生命力」を描くことを決意し、1960年の新制作展に《白樹》(豊橋市民病院蔵)《萌林》(愛知県美術館蔵)を出品し、新たな作風を示しました。そうしたタイミングでのヨーロッパ旅行は、異文化からの影響というよりもむしろ、日本の文化・風土に立脚すべきという方向へと平川を誘いました。帰国後しばらくは日本画の墨線を重視し、色彩を減じた作品を描くようになり、1969年に描かれた《樹凌》は白、黒、青、金という4色に色彩を絞って描かれています。

正義は闘病の末1977年に53歳で亡くなりました。逝去に際し寄せられた平川のコメントを紹介します。「文字通り喜びも悩みも共に三十年の間柄で、語りたことは山ほどあるが、いまはただ友人として静かにめい福を祈りたい。」(「東愛知新聞」1977年4月18日号)

memo

名古屋市美術館  Nagoya City Art Museum

名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の社 白川公園内)

TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005

<http://art-museum.city.nagoya.jp/>